

人のつながりから新しいことが生まれ続ける社会に ～地域をDIYするということ～

コワーキングスペース「チガラボ」代表 清水 謙

◆はじめに

私は1974年生まれ47歳、4社勤務ののち、2014年独立・起業し、2017年に茅ヶ崎市で「チガラボ」を立ち上げました。

サラリーマンの時は大きな会社や組織、人事に対するコンサルティングをしていました。やりがいのある仕事でしたが、全然違う世界がもっとあるはずだということをぼんやりと考えていました。そこで漠然と浮かんできた言葉が「ローカル」とか「ソーシャル」で、茅ヶ崎で知り合った人と毎朝サーフィンをするような生活をしていたのですが、仕事とバランスをとることは持続可能なのか、これが理想形なのかともやもやしていました。

そうした中で茅ヶ崎で知り合いを増やしたいという思いから、コミュニティ菜園を借りてみました。そこで知り合った人は、主婦やシニアの方が私と同じように、地域ともっと接点を持ちたい、食卓に並ぶものを少しでも自分の手をかけたものを使えたらうれしいという感覚を持ち、地域に関心を向けた前向きな方が多いと感じました。無農薬のやり方に詳しい方を呼んで、みんなで作って食べて、作り方もレシピにしました。知人の店舗の店先で売ってみることで小さな経済循環も試してみました。そうこうしているうちに「食」や農業が地域の入り口になっていて、いろんな人が関わることにつながると思うようになりました。

縁があって東北の沿岸部の被災地エリアで、人手がなくて困っているところに1年ぐらい「右腕コーディネート事業」をNPOの人たちと行いました。そこで出会った人たちが強烈でした。私は、一流大学を出て良い会社においてステイタスのある人たちとコンサルタント会社で仕事をさせてもらっていましたが、それとは全く違う理屈で動いていたり、なんの格闘技かわからないけれど妙に強い人たちに衝撃を受けて、これは自分の見てきた世界とは全く違う理屈があることを知りました。

あわせて地域でこのように活動する人がやっていることの意味や目的、その先のビジョンなどをあたりまえのように自分のこととして語る世界に出会いました。使っている言葉が同じだけれど何か違うと感じました。これまでとは違う社会の在り方とか、生き方・働き方が浮かんできたのでした。こうした経験から、一人ひとりのオーナーシップ（主体性）が活かされたり、一人ひとりの違いが混ざって価値になることが「共創では



はないか、そして価値が生まれる先にいい未来が現れることができたらよいと思うようになりました。

そして自分に何ができるか考えたときに、様々な人をつなげたり、よい関係性から物事が生まれるようにとの思いから、「ヒト・コトによい変化が生まれるための、自走のデザインと働きかけ」というキーワードが生まれました。

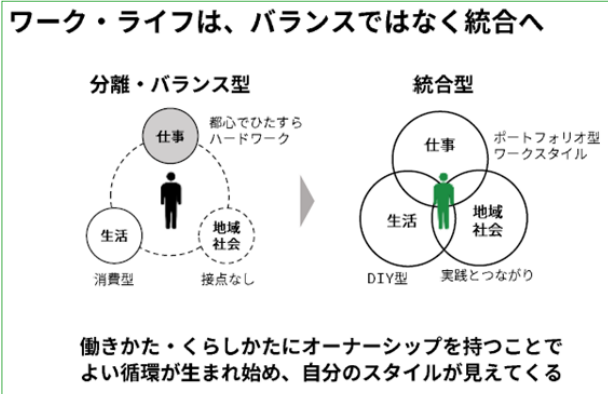
◆地域とのつながり～湘南・茅ヶ崎～

茅ヶ崎は東京から東海道線で1時間約50Km、冬は少し暖かく、夏は少し涼しい場所です。特に目立ったものは「サザン・オールスターズ」以外ありません。南北に広い地形で南（海側）は移住者が多く、北（山側）は地元の人が多く、人口がコロナ禍の中で増えていて24万2000人です。30～40代の子育て世代が増加して高齢化率が低いのも特徴です。都心通勤が多い一方海の街でこだわった趣味性の高い小さな商店も多く、自分のライフスタイルやカルチャー中心のスタイルで暮らせる街です。

その中で「チガラボ」は明日なくなっても困らないのですが、色々なことが生まれるよう「塩梅」する場所です。ご近所に必要な要素であるコミュニティやオーナーシップ、多様なつながりなどがあります。ひとつのコミュニティに全身全霊を捧げると、人間関係が崩れると致命的で苦しくなります。昔は職場、近所などさまざまなコミュニティがありました。その方が健全であると思います。

「チガラボ」を作った時にイメージしたのは地域の中で色々な人が集まって、それぞれの人がやりたいことや好きなことを形にしていく、それが職場でも家庭でもない第三の場所、「サードプレイス」になります。なおかつ何かを実験しているラボ型のサードプレイスになると面白いのではと考えました。そこには地域や社会の視点が集まるということです。そうすると行政、大学、企業等の人たちにも、何か面白いテーマが集まっている場所

と見えるし、見方によってはSDGsのターゲットに向けた動きかもしれないし、結果としてSDGsの取り組みになっていくかもしれません。



◆「チガラボ」は「たくらみ」をつくる場

「チガラボ」はカフェのようなガラスを多用した明るくゆったりとしたスペースで、ビルの5階にあります。いろいろな人のつながりから新しい「たくらみ(TAKURAMI)」が生まれる社会を目指しています。「たくらみ」というのは、少し悪い、遊び心的なニュアンスがありますが、まじめに「社会を変える」というようなことを大上段にかけるよりは、何か思いついたり、いいことを考えるみたいなことから動いていく方が自然で無理がないのではと考えています。それ「いいね」というところから緩やかに受け入れられる、安心・安全感が大事でそこから人がつながったり、応援してくれるつながりも生まれます。新しい取り組みが実践されていけばよいと思っています。

◆つながる仕掛け

「チガラボ」にある大きな本棚はここに集まってくるコミュニティメンバーの自己紹介の棚で、人となり本棚から見えてきます。コミュニティメンバーは約100名、経営者・自営業55%、会社員30%、起業準備中、主婦、学生15%です。男女比65:35、年齢層は16~77歳です。年代・職種ともさまざま、個性豊かな多様性の高いコミュニティで、東京や他地域のメンバーもいます。「たくらみ」の秘密基地的な感覚でとらえている人が多くいます。

今までで一番多かった年のイベントは263回、半分はメンバーが企画しました。今年はコロナで飲食系やリアル企画はできないので半数くらいになっていますが、主に何かを実験的なイベントを開催する場になっています。去年はオンラインで海外からも参加があり、リアルとオンラインをハイブリッドで行う企画もしています。そのほか音楽、地域の食べ物でつながるなどテーマの幅広さと参加のハードルの低さによって、気軽に集まる場を作っています。自分の気になるテーマを「場」に出していくことで人とつながったり、仲間集めをするための

手段としてイベントをおこなっています。

◆場の関係性を大事にする

「場」として大事にしていることは「共に考えていくということ」です。「共創型」といってその場をつくり考える人がメインで、多様な視点に価値があるという考え方がベースにあります。

そのためチガラボの「場」では必ずはじめに自己紹介をして、参加者の人となりを知ることから始めます。そこで心理的安全というのも形成されていき、そのうえで呼び水になるようなプレゼンテーションをしてもらいます。映画、音楽などの具体的な企画が出てきて感想や意見をシェアし、その後の交流会でゆるやかにつながって、次につなげていくプロセスをくりかえしていくと、人が集まりやすくなります。

◆「たくらみ」が集まる生まれる「チガラボチャレンジ」

とはいえ何かやりたいことが最初から自走するのは難しいので、まずはぼんやりした状態で口に出してみます。そうして少しまとまったら発表してみる場、「チガラボチャレンジ」を毎月1回やっています。そのあとにチガラボメンバーが主催者になってイベントを作り、活動が続いていくというようなステップを踏んでいくための「たくらみ」が生まれ、さらにつながりが継続していくための仕掛けを考えています。

「チガラボチャレンジ」はこれまで51回開催しました。毎月2組が発表していますが、発表者はやりたいことを整理できる、宣言することで気持ちが固まる、他者の意見などで考えが磨かれるといった効果があります。聞いている側も刺激を受けて自らやりたいくなる、やりたいことについて考える機会にもなります。

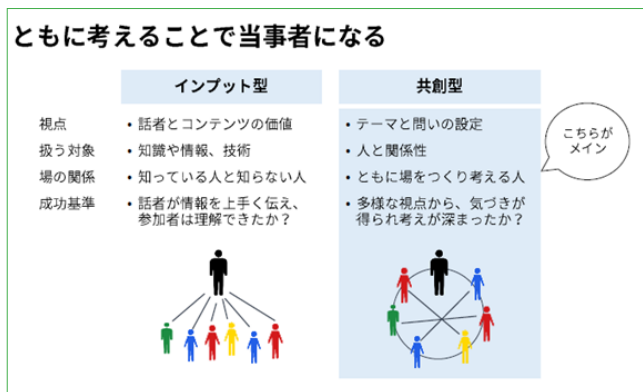
テーマは音楽、福祉、アート、写真、子育てなどさまざまです。時々、スライドや資料も何もなくて話すだけの勇者もいますが大歓迎。来てくれた以上はその場で図式化したり、なんとか思いを伝えるように手助けしつつみんなで作っていきます。その場で関係性もつくっていくことが大事だと話しています。

◆「たくらみ」を考えるための問い

問われるのはどうしてそのことをやりたいのか、何を実現したいのか、縦の軸を大事にするようにと皆さんと話しています。ここが見えるとどうやってやるかという手段の話はあとからいくらでも考えられます。その手段がやりたいことに対してどれだけ有効なのかわかりません。でも最悪なのはやりたいことに対してマイナス効果を与える手段を頑張ってしまうことです。みんなが主体的になる場づくりをしたいといいながら、主体的になることを強制するみたいなのが起きたりするとお互いに辛くなります。手段は調達していけばよいのです。

どんなテーマでも「やりたい」「やってみます」という人を増やしていくと、見守ってくれる人や気にかけてくれる、遠巻きに見ている人が必ずいます。その人が何かのタイミングで、アドバイスをくれたり、急に手伝ってくれたりすることでその人もどんどん当事者になっていきます。面白い取り組みには人が集まってきます。やってみたら振り返り、経験や学習を重ねて物事が積みあがっていけばよいと思っています。

またこうしたたくらみがどこにあるかということもwebサイトで見える化したり、半年に1回くらいは集まってそれぞれでどんなたくらみをしているかを共有し合うような場も作っています。「たくらみフェス」を毎年5月と11月に行っています。地域のたくらみを文化祭的に体験してもらったりしています。藍染や海のプラごみを使ったアクセサリー作りなどのものづくり、畑の活動、手話特区を作ろうなどのたくらみが紹介されました。



◆まちをまるごと「ラボ」(実験室)に！

こういうことをやっている、さらに地域でいろんな広がりが必要になります。人と必要な物事が、必要な時に適切につながることが大事なので、手あたり次第つなげていくのではなく、その人に必要性が見えていることがポイントになります。そのために良い関係を築き、お互いの意図を知ることが必要です。背景にあるものを見ることでわかりやすくなります。活動へのかかわり方もいろいろで距離感が違います。まずは可能な範囲でこの部分だったらできそうかと許容することが大切です。重要なのは「自分で選んだ」という自覚を持っている事です。

居場所という切り口でみると、同質な似た人だけでやるよりは異なる団体との接点を持っている方が違う学び合いが起きています。多様な集合体が地域であると考え、狭い地域は多様なつながりが濃いといえます。地域で似たような問題意識を持っている人がゆるやかにつながる場を作るときは、初期はリーダーが推進役になりますが、ずっとやると依存型になっていきます。なので、リーダーがひっぱりつつメンバーの個別の状態や得意技などの見立てをしながらゆるやかに役割を分散し、そこをつなげながらフォローします。

最後は自走していくように、リーダーを任せられる人がいるのか、リーダーシップ自体を分散したりするのかを考えながら渡していき、見守っていく段階を踏むと組織が自走しやすくなります。

◆さまざまな「たくらみ」の事例

①ワーケーション

WorkationはWork + Vacationの造語です。働く個人を主体としたときに、その人らしい働き方をどう描いていけるかをメインにしています。湘南を4地域(茅ヶ崎・藤沢・鎌倉・逗子)に分け、特徴の異なる4つの地域活動の連帯をしています。近くに拠点があることで人が集まりやすくなります。地域の施設などでさまざまなイベントを行っています。新しい価値を創造し、人と一緒に新しい活動を生み出そうという試みです。これは全国でも取り組みが広がっています。暮らす、働く、遊ぶが混ざり合ったスタイルと言えます。

② Edible Park 茅ヶ崎

地域の貸農園を利用し、野菜作り以外の事もやっています。800坪の広い農地を「パーマカルチャー」という持続的な農業を学びながら作る取り組みです。井戸しかないところから始まり、畑でヨガをやったり、ロケットストーブを作り料理して食べたり、鳥小屋を作りひよこを育てたり、いろんな人がここに集って実験をしています。

③湘南ワンハンドレッドプロジェクト

神奈川県との共同事業で3年間でいったん区切りとなりますが、人生100年時代のロールモデルを地域で発掘、取材しながら発信しています。多世代が混ざってお互いの生き方を学びながら一緒に何かをたくらもうという活動です。地域に関わる人をコーディネートするチームを作ることをNPOの事業としてやっています。

◆まとめ

「チガラボ」でいろんなことをしながら重なり合ってくると、それぞれがいい関係で自分の働き方、仕事、暮らす地域とも重なり合ってきます。その1歩目である小さなたくらみ、自分のやりたいこと、気になること、できることが地域とつながっているとより豊かになっていきます。問われるのは関わる人に向き合う姿勢です。そういう関係を続けていくと「社会関係資本」というものが溜まり、困ったり、何かをしたい時に助けてくれる仲間がすぐにできます。これこそが長い人生の中での心理的安心・安全であり、豊かな居場所、地域であると思います。このようなラボ(実験型)のサードプレイスの中から、より豊かな地域の居場所などがたくさん生まれるように今後も活動を続けていきます。(しみずけん)

「参加型福祉まちづくりフォーラム」アーカイブはこちら
<https://www.youtube.com/watch?v=wvqHu5Tbq3g>